「底が突き抜けた」時代の歩き方449

世界はあまりにも救いのない残酷さに満ち満ちている！
――北オセチア学校占拠事件

北オセチア学校占拠事件に対するマスコミや世間の反応は、判で押したような一本調子に貫かれている。たとえば、０４．９．８付「産経抄」は次のように書いている。

《大仰な物の言い方を承知で書くが、北オセチア共和国の学校占拠事件は時間を何百年も逆行させ、とんでもない時代の曲がり角を回らせた。２１世紀の現代から暗黒の中世へ、時計の針が大きく後戻りしたように思えてならない　▼死者・不明は５百人を超える惨状で、３０数人の武装テロリストが学校を占拠した目的は、ほかでもない無辜（むこ）の少年少女や教師や父母たちを殺戮すること、ただそのことにあった。政治的な主張や取引のためではない。当初から子供たちに塗炭の苦しみを与え、皆殺しにするつもりだった　▼彼らは子供たちを壁ぎわに弾よけにして立たせ、水も食料も与えず、逃げる子には背中から銃弾を浴びせた。このような冷酷非道さは、生命に対する人間の倫理観を根底から覆した。これはドストエフスキー文学、たとえば『悪霊』の登場人物の所業である　▼あるいは中世ヨーロッパの「黒ミサ」の世界の犯罪である。人間には人間として、してはならないルールやモラルがあったはずだった。女性や子供たちには手をつけないという人倫の〝黙示録〟がドブに捨てられたということで、事件は歴史的といわなければならない　▼そんな中世的暗黒と狂信の現場で、一すじの光明を見た。１３歳のハッサン・ルバエフという少年の勇気である。彼はテロリストに正面切って抗議、「あなた方の要求にはだれも応じない。われわれを殺しても何の役にも立たない」と叫んだという　▼テロリストは「お前はそう確信するのか」と問い返し、ルバエフが「はい」と答えると次の瞬間に銃声が響き、少年は倒れた。なんという野蛮、しかしまたなんという勇気だろう。堂々と正義を訴えて散った少年の光芒（こうぼう）の人生を、涙してたたえたい。》

確かに、「２１世紀の現代から暗黒の中世へ、時計の針が大きく後戻りしたように思えてならない」。ただし、北オセチア学校占拠事件だけを指してそういうわけにはいかない。９・１１によって、「暗黒の中世」が幕開き、アメリカのイラクに対する先制攻撃に至って、「暗黒の中世」はど真ん中に踏み入った感がしないでもない。筆者自身、「大仰な物の言い方を承知で書く」と先手を打っているが、彼の「大仰さ」は学校を占拠した武装テロリストの目的が、「ほかでもない無辜（むこ）の少年少女や教師や父母たちを殺戮すること、ただそのことにあった」という点に向かっている。「子供たちを壁ぎわに弾よけにして立たせ、水も食料も与えず、逃げる子には背中から銃弾を浴びせ」るという彼らの「冷酷非道さは、生命に対する人間の倫理観を根底から覆した」というわけだ。

だが、「このような冷酷非道さ」は死を覚悟した自爆テロの論理からすれば、極めて明快に説明できる。武装勢力が学校を占拠した時点で、囚われた子供たちを含む人々はすでに彼らの死出の道連れにほかならなかった。彼らにとって子供たちは自分たちと一緒に死にゆく者であったから、「子供たちを壁ぎわに弾よけにして立たせ、水も食料も与えず、逃げる子には背中から銃弾を浴びせた」り、およそありとあらゆる「冷酷非道さ」を平然と見せつけることができた。しかし、そのような彼らの行為が本当の意味で「冷酷非道」であったわけではない。本当に「冷酷非道」なのは、突然押し入られた武装勢力に無理矢理子供たちを含む人々が、彼らの自爆テロの道連れにされることではなかったか。彼らが学校を占拠したのは、自分たちの自爆テロが最大の効果を発揮できる場所であったからである。大阪教育大学附属池田小事件の犯行者の宅間守が、自分の死出の道連れをできるだけ多く見つけるのに、小学校ほどふさわしい場所はないと考えたのと、全く同じ発想であった。彼は後に法廷で幼稚園ならもっとよかった、と証言しているが。

「人間には人間として、してはならないルールやモラルがあったはずだった。女性や子供たちには手をつけないという人倫の〝黙示録〟がドブに捨てられたということで、事件は歴史的といわなければならない」と「大仰な物の言い方」は続くが、「女性や子供たちには手をつけないという人倫の〝黙示録〟」なんかは、９・１１以降のアフガン空爆や、現在も続いているイラク侵略戦争では吹っ飛んでしまっていた筈だ。もちろん、９・１１以降の戦時下だけでなく、９・１１以前の戦時中でもいつも「人倫の〝黙示録〟」なんか振り向きもされてこなかった。「冷酷非道」の極みである広島、長崎への一瞬の原爆投下を挙げるまでもない。したがって、今回の北オセチア学校占拠事件を特別視して、「事件は歴史的」であるなどとどうしていえるだろう。この事件は紛争一つない平和な日常生活の中で、突然降って涌いた大惨事であったわけではけっしてなかった。

学校占拠事件を起こした武装勢力はチェチェンの独立派とみられているが、４００年間にわたってロシアの侵略に痛められてきたチェチェンが、ソ連崩壊直後の９１年にロシアからの独立を宣言して以降、独立を認めないロシアによってどれほどの凄まじい攻撃を受けてきたか、そのことを抜きにしてこの事件を語ることはできない。９６年８月にチェチェン独立派が首都グロズヌイを奪還して、ロシアが事実上の敗北を喫し撤退したその時点で、チェチェンは合計８万人の犠牲者を出し、そのうち半数以上が非武装の民間人とみられている。９９年９月には、モスクワでの相次ぐ集合住宅を狙った爆破テロがチェチェン独立派の仕業であるとして、全国的な「対テロリズム作戦」開始を宣言したエリツィン政権は、再度首都グロズヌイを空爆、大規模攻撃を行った。ロシアの人権団体「メモリアル」などによると、この時の推定死者・行方不明者は約２０万人である。

９９年１２月にエリツィン大統領が辞任して、チェチェン制圧で伸し上がってきたプーチン首相が政権を握ると、チェチェンに対する武力攻撃はより激しさを増し、チェチェン武装勢力の自爆攻撃も連続して発生した。学校占拠事件は０２年１０月にチェチェン武装勢力が、戦争停止とロシア軍撤退を要求して観客およそ９００人を人質に立てこ

もったモスクワ劇場占拠事件と酷似しているが、この時の犠牲者は１２９人であった。このようなロシアの圧倒的な武力攻撃に対するチェチェン武装勢力の自爆攻撃の繰り返しという、「血で血を洗う凄惨な抗争」を背景とすることによってしか、学校占拠事件はみえてこない。ロシアとチェチェンの戦争のなかに、では、どうして北オセチアが入ってくるのかという疑問が当然起こってくるだろう。北オセチアではなく、ロシア内の学校を襲えばよかったではないか。だが実は、０３年８月、北オセチアの軍病院で自爆テロが起こって、約５０人が死亡しているのである。

北オセチアはチェチェン戦争とけっして無縁なわけではない。北オセチアのオセット人の人口５０万人のうち、キリスト教（ロシア正教徒）が７割を占めていることからもわかるように、ここは伝統的に親ロシア的な共和国であるために、チェチェンのイスラム教と北オセチアのキリスト教という対立図式が醸しだされやすいが、それだけではない。１８～１９世紀のロシア帝国とカフカス山岳諸民族との戦争で、北オセチアはロシア軍の進出拠点となった歴史的経緯があるし、また第二次大戦末期の４４年にスターリンがチェチェン人、イングーシ人を中央アジアに強制移住させた際には、オセチア人がイングーシの領土の一部であるプリゴロドヌイ地区を併合したこともあった。ソ連崩壊直後の９２年に北オセチアとイングーシとの間で武力衝突が発生することもあったし、なによりも決定的なのは、ロシア軍基地や軍病院がある北オセチアのモズドクが、チェチェン武装勢力を掃討するためのロシア軍の出撃拠点となっていたことであり、そのため、チェチェン武装勢力による自爆攻撃の標的になってきたのである。

冒頭の産経抄はこのような歴史的背景の中に、北オセチアの学校占拠事件を置いて捉えようとしているのだろうか。産経抄とて歴史を知らないわけではあるまい。おそらく充分知った上で、武装テロリストの「冷酷非道さ」を強調しているにちがいない。チェチェン戦争の歴史がどうであろうとも。これまで「人間には人間として、してはならないルールやモラルがあったはずだ」し、「女性や子供たちには手をつけないという〝人倫の黙示録〟」があったではないか。それが今回、武装テロリストによって易々とその結界を突き破られてしまったという思いから、「事件は歴史的といわなければならない」という悲憤、慨嘆がやってくるのだろう。しかし、今回の事件に至るまで、本当に「人間には人間として、してはならないルールやモラルがあった」か。「女性や子供たちには手をつけないという人倫の〝黙示録〟」は、守られてきたか。チェチェン戦争においても、「してはならないルールやモラル」が破棄されることはなかったか。

チェチェン人ジャーナリストのザーラ・イマーエワが、自分たちが製作したドキュメンタリー・ビデオ『子どもの物語にあらず』を上映しながら、同じ題名の講演を行って「チェチェンでいま起きていること」を報告（『世界』０４．２）している。彼女によれば、チェチェンでは「ジェノサイド」といわれる事態が起こっているのであり、ロシアはチェチェン民族の抵抗者たちに対して、当初は「分離主義者」、次に「武装分子」、「破壊工作分子」、最後は「国際テロリスト集団」という言葉を投げつけている。過去

１０年間の戦争で彼女は親族１７人を亡くしており、父方、母方であれ、「自分の祖父、祖母なる者に会ったこと」がなく、「私の家系が生き残ったことが全く奇跡と思えるような、多くの人的損失があった」と、まず自分について語りながら、その「人的損失」についてこう続ける。
「多くのチェチェン人の氏族や、部族まるごとが完全に消滅してしまいました。彼らは女性や乳飲み子も含め、皆殺しにされたのです。残念ながら今日でも、この件は過去形で話すことができません。チェチェン人に対する殺戮は、今日只今も続いているのです。今晩、覆面をした兵士たちが、やってきて扉をたたく家が何軒あるのか、何人の人々が自宅の玄関から連れ去られ､行方知れずの帰らぬ人となるのか､想像もつきかねるのです。
　そう、文明社会は、このような暴力に対し、国際法、推定無罪、人権といった対抗手段を備えてきました。しかし、これらの権威も、なんとも単純な国家間の『経済的利益なるもの』に左右されてしまうことは、周知の事実なのです。」
　彼女は、「私たちは連続した時間の概念を感じることができません。過去はすでになく、未来ももはやないかもしれない。なぜなら、自分の家の上を飛び、大きな音をたてている爆音、爆弾はまさに自分をめがけて、自分の命を狙っているのだ、と恐れているのですから」と、世界の無関心の中でも「チェチェンは生き抜き、戦い続けています」と語る一方で、チェチェンの子どもたちがこの戦時下でどのように過ごしているのか、詳しく説明する。
　激しい爆撃を受けていた間、彼女と隣人が身をひそめていた「一番堅固なコンクリート造りの旧ＫＧＢの建物」の「地下室では、ときに本当にまだ小さな子どもが、驚くべきことに大人よりも正確に、どんな戦闘機が自分たちの上空を飛んでいるのか、言い当てることができました。子どもたちは偵察機を、『告げ口屋』と名前をつけ、爆撃機、それから、爆撃を終えた空荷のそれをもすぐに言い当てました。子どもたちは、『どうして僕たちを殺そうとしているの？』『なぜ僕たちのお家を壊しているの？』という問いに母親が答えられないときは、ゆっくり、そして大きな声でお祈りを唱えるように頼むのでした。自分の知らないアラブ語でも、続いて一緒に唱えられるように、ゆっくりとと頼むのです。
　最初の戦闘が始まったとき、私は親友の家で、次のようなシーンを目撃しました。５歳と３歳の姉弟が、空爆の際に古いベッドの下に隠れました。その家には地下室がなく、ほかに行き場がなかったのです。女の子は弟をかばって覆いかぶさり、同時に奥へ押しこもうとしながら、お祈りのために組んだ手をベッドから出して、天井を見つめ、『神様、はやく飛行機がどっかに飛んでいってしまうようにお願いします。私たちは小さくて、何も悪いことなんかしていません』と早口に懇願していたのです。」
　ザーラ・イマーエワは、「このような悲しい出来事や、精神的な重荷から私が解放されることは、おそらく永遠にないでしょう」と続けて語り、彼女が製作した映画『子どもの物語にあらず』について、「本当のことを言うと、私はこのような想像も及ばぬよ

うな出来事があったにせよ、民族に関わりなく、ほかのあらゆる子どもたちの幸せを願う、そんな、かわいらしい清らかな心を持った子どもたちの映画を作れれば、と思っていたのです。私は懸命に努力しましたが、ものにはなりませんでした」という思いを率直に表白して、撮影しているときに偶然出会ったアスランという子どもに言及している。「彼は道でサッカーをしていたのでしょう。汚いランニングシャツに裸足で、隣人の家に独りでやってきたのです。『ここで戦争の映画を撮っているの？　それなら対戦車ロケットランチャーと戦車を貸して』と言いました。私が面白がって『自分の身長より大きくて、たいそう重いロケットランチャーをどうやって持ち上げるの？』と訊くと、『壁に立てかけて撃つからさ』と言うのです。『戦車は操縦できないでしょ』と言うと、あっけらかんと『まず戦車の動かし方を習ってから、撃つんだ』と答えたのです。もちろん武器をあげることなどできませんでしたが、この子は気さくに戦争についてカメラの前で証言すると言ってくれました。私は手で合図をしてから、カメラを回すからと説明しました。

いくつかのマスコミは、子どもたちは『予め練習し、仕込まれていて』大人の望むようなことを言うだけだ、と書き立てています。もちろんインタビュー前には、どこでも行なわれるようなリハーサルは必要です。でも私は、私と子どもたちの様子をすべて収録したビデオを保存しています。映画の編集の段階で外された部分にも大切な情報がたくさん詰まっているのは言うまでもないからです。

アスランと私たちは『戦争はなんと良くないことか、自動小銃をもって人を殺しに行くなんて、なんとばかげたことか』と話し合いました。話しているうちに、ついついジャーナリストにもちまえの『手口』が顔を出しました。『もし君のパパが、銃をとってロシア人の子どもを撃ちに行く言ったらどう答える？』と訊くと、ショッキングな言葉が返ってきました。『殺せっていうよ』『だって相手は、まだ小さい子どもなのよ。満足に口も利けない……』憐れみの心を引き出そうとそう、たたみかけました。『第一、赤ちゃんは何も知らずに、揺りかごで寝て泣いているのに、それでもかわいそうに思わないの？』というと、ぶっきらぼうにさえぎります。『ねえ撮影するの？　しないの？』慌てて『わかった』というと、『じゃあ手で合図してよ』と言うのです。カメラを回した途端、レンズにまともに向かって、身も凍るようなことを言ってのけました。『僕は小さなロシア人の子どもを憎む。奴らは大きくなったら、人を殺すんだ。生まれつきそうなのさ』」

映画は編集段階で削ったものの、「撮影中に６歳のある女の子が『私がまだ小さかったときに、戦争があって、大きくなったけどまた戦争。一生、戦争だわ』と言ったことや、映画に数秒しか出ていない５歳のゼムリハンは、「精神的なショックをうけていて、戦争を思い出すたびに言葉を忘れ、わけのわからないことを口走」り、「『戦争なんて、いやなんだ！　やめてくれ』と頭を振り振り、繰り返すばかり」の様子についても伝えようとするが、映像を見たチェチェン人権問題公式代表と名乗る男は、「何だっていう

んだ、こいつらは、大方が破壊工作集団のがきどもじゃないか」と言い放ったという。彼女は「ロシアの公式統計によれば、チェチェン戦争で、２８００人の子どもたちが、身体障害者となり、約１万人が両親を亡くしてい」ることや、その数字には結核、ジフテリア等の病気の子どもは入っておらず、更に「各国の、公平な専門家たちの信頼できるデータによれば、２０００年１２月の時点で、すでに子どもたちの死亡者数はこの公式数字を大きく上回」り、「７０００人の子どもが身体障害者となり、１万６０００人が戦争孤児となっている」という。

もちろん、ロシアにも少数ながら、チェチェン戦争に対して公正な見方を示して、自分たちに手を差し伸べてくれるロシア人たちがいることに触れた後に、「流血のうちにずたずたに引き裂かれている私の小さな祖国チェチェン」は「『戦争、戦争、そしてまた戦争』だけの地ではないのだ」と、彼女が強く訴えているのを聞くと、自分たちの国が滅ぼされ、自分たちの歴史と文化が失われようとすることへの危機感に駆り立てられているのが、十分伝わってくる。

「チェチェンには、他に例がない古い石塔建築があります。その岩の表面に彫り込まれた絵には、消え去った古代文明の名残りの文様が見られます。私たちの言葉、チェチェン語の響きに耳を傾けてください。チェチェン語は、世界的に有名な幾つかの大学で最古の原初言語として必修科目になっているのです。チェチェン山岳地方の女性の祭の晴れ着である民族衣装をご覧ください。そこには古代ギリシャ神話のアマゾネスたちがまとった鎧のスタイルの名残りを見ることができます。古典を渉猟(しゅうりょう)なさるなら、ストラボンの『地誌』やヘロドトスの『歴史』を繙(ひもと)いてください。そこには、私たちの国についての生き生きとした記述が見られるのです。いつの日か、ロシアのいくつかの歴史博物館の非公開の間に招待されることがあれば、ぜひ、他に例のない展示品、とくに青銅器時代のそれらを注意深くご覧になってください。私たちの文明の至宝揃いなのです。私たちは口承言語を保存してきました。その音声の意味を評定することもできれば、現代の文献からすでに失われたシュメール語やウラルトゥー語を引き出すこともできます。チェチェンの大地には、考古学で言うところの『文化層』がそれこそ幾層にも連なって埋もれているのです。

私たちの古い城塞は、地上からも、空からも砲爆撃で破壊され、私たちの地下資源は横領・略奪され、言語は忘れ去られ、子どもたちは読み書きもできないままに育っています。私たちの歴史と文化は忘れ去られようとしています。私たちの社会的な相互関係を律してきた民族的名誉を尊ぶ不文律は、あたかも不気味なクークラックスクランのとんがり帽子ででもあるかのように貶(おとし)められ、その陰で現代ロシアのファシストたちが、チェチェン人の間にせっせとユダを作り出しているのです。しかし私たちは自らの未来を信じております。」

戦争に明け暮れているようにみえるチェチェンが、どのような歴史的な伝統と文化が堆積されてきた国で、「社会的な相互関係を律してきた民族的名誉を尊ぶ不文律」でつ

ながっている民族であるかが、簡単に説明されている。この説明の中には凄惨な戦争被害を訴えかける悲哀に満ちた調子はみられないものの、自分たちの国、民族に対する切羽詰まった危機感が底流している。彼女がチェチェン戦争とは、同じ力量をもった国同士の抗争なんかではなく、ロシアの「チェチェン民族に対する計画的な民族殲滅作戦」にほかならないというとき、チェチェン人の皆殺しを通じてチェチェンの国は当然のこと、歴史的な文化や伝統など一切を滅却し尽くす、つまり、チェチェンという国、民族がかつて存在していた痕跡をすべて跡形もなく消してしまう戦争として捉えられていることがわかる。

ザーラ・イマーエワのチェチェンという自分たちの祖国や民族の行く末を想う切なさに痛く心を打たれる。冒頭の産経抄はなるほどチェチェン戦争についての知識や情報は一通り揃えているだろうけれども、その知識や情報の裏面にみえないかたちで沈潜している、抑圧された悲しみややりきれなさ、幾重にも折り重なった絶望と虚無などを両手で掬い取ることができなければ、武装テロリストはどこまでも武装テロリストとしかみえないだろう。武装テロリストとしかみえなければ、彼らの底が突き抜けた「冷酷非道さ」ばかりが浮かび上ってくるほかない。ルールもモラルもあったものではないという憤りに対しては、もともと戦時下ではルールもモラルも存在しなかったし、敵をできるだけ多く殲滅することが最大目標とされてきたのではなかったか、と言い返しておこう。

敵はもはや戦闘員に限定されず、非戦闘員である女性や子どもたちまで含まれているのが、戦争（場）の論理となっている。ロシアのチェチェンに対する組織的な攻撃は、その論理にみごとに貫かれている。であれば、チェチェン側の圧倒的に劣るゲリラ的な攻撃が自爆テロのかたちをとって、相手側の隙間を縫うようにして応酬することになるのは避けられない。ザーラ・イマーエワの映画や講演の中に出てくるアスランという少年が、「僕は小さなロシア人の子どもを憎む。奴らは大きくなったら、人を殺すんだ。生まれつきそうなのさ」、だからロシア人の子どもたちも殺してもかまわない、いや、殺すべきだといった調子を帯びて言うとき、彼は糖衣錠でくるまれた言葉や気分や雰囲気などを一切剥ぎ取って、自分たちがロシア軍からされてきた仕打ちに対する憎悪や怨念をそのまま口にすれば、そう言う以外にない、正直な気持ちをさらけだしていたのだ。

アスランがいうように、ロシア人の子どもも大きくなったら、自分たちチェチェン人を殺しにくるとみるなら、ロシア人だってアスランのようなチェチェン人の子どもも大きくなって、武装テロリストとして自分たちを殺しにくるとみるだろう。そのような見方のなかにロシア人もチェチェン人も放り込まれており、女性や子どももけっして例外ではないということだ。少なくともパレスチナにしてもチェチェンにしても、有効な反撃方法としてすぐに女性が自爆テロの主役として躍り出ているし、その次には子どもの自爆テロが突出してくるのも時間の問題と思われる。世界の救いがたい残酷さはもはやそのレベルにまで突き抜けているのに、北オセチアの学校占拠事件を取り上げて、「女性や子供たちには手をつけないという人倫の〝黙示録〟がドブに捨てられた」などと宣

うナイーブさは、あるがままの事態を見つめる目を曇らせるだけだろう。

折角だから、産経抄が触れている、武装テロリストに撃たれた「１３歳のハッサン・ルバエフという少年の勇気」についても、先のアスランという少年を引き寄せて述べてみよう。ルバエフは、「あなた方の要求にはだれも応じない。われわれを殺しても何の役にも立たない」と武装勢力に叫んで撃ち殺されたが、この少年の勇気について疑う余地はないとしても、敢えていうなら、その勇気の真っ直ぐさが気にならないわけではない。彼は死を覚悟している武装勢力にむかって、あなた方の行動はまちがっていると諫めたのだ。それに対して彼らは、お前は命を賭けてそういっているのか、と問い返した。ルバエフは命を賭けていると答えたので、銃声が次の瞬間に響いたというふうに読み取れる。武装勢力にすれば、もともと全員を殺すつもりであったので、自分たちに抗議した少年を先に撃ち殺したにすぎなかった。

いうまでもなく武装勢力の背後には、ロシア人の子どもも殺せ、と叫ぶアスランのような子どもたちがひしめいている。そうすると、ルバエフが武装勢力に向き合っている場面は、チェチェンの子どもと北オセアチアの少年とが対峙している場面に置き換えることもできる。学校を占拠したアスランにむかってルバエフが、「われわれを殺しても何の役にも立たない」と叫んだなら、アスランはきっとこう返すだろう、「われわれを殺しても何の役にも立たない」のに、君の国が支援するロシア軍は自分たちのような幼い子どもたちまで殺戮してきた。チェチェン人であれば、女も子どもも容赦なく撃ち殺されるという戦争の状況の中で生き抜いてきた僕たちは、ロシア人やオセチア人であれば、女、子どももかまわず殺さなければ、自分たちが殺られるということを肌身に感じながら、こうして生きてきたのだ。君が「われわれを殺しても何の役にも立たない」というなら、ロシア人がチェチェン人の女や子どもを殺すことはロシア連邦の維持に役立つという発想に立つ以上、僕たちは君たちを殺すことが役に立つと答えないわけにはいかない、と。

産経抄が「これはドストエフスキー文学、たとえば『悪霊』の登場人物の所業である」と、ドストエフスキーの名を持ち出すのであれば、彼なら、ルバエフという少年の悲劇は、少年の勇気に対して武装勢力が射殺という野蛮さをもって報いたところにあるのではなく、自死を前提にした武力勢力の「皆殺し」の目的にむかって、「われわれを殺しても何の役にも立たない」という、あまりにも真っ直ぐな正当論をぶっつけた〈ズレ〉にあったことを見抜いたにちがいない。

たとえば、こういう光景を思い描いてほしい。強力で圧倒的なロシア軍の武力攻撃の前で、チェチェン人は大人だけでなく、女も子どももこぞって、「あなた方の要求にはだれも応じない。われわれを殺しても何の役にも立たない」と何度も主張してきた。しかし、ロシア軍はチェチェンの独立を諦めないなら、皆殺しにするといわんばかりに嵐のような空爆や砲撃を行い、そこまではしないだろうと思っていたチェチェン人は、敵の目的が自分たちの「皆殺し」にあることを覚ったのである。ザーラ・イマーエワが、

「チェチェン抵抗運動の戦士たちは、事実、大砲といった重火器、飛行機、そしてあらゆる意味での装甲車両などを全く持っていない」というように、自爆攻撃（テロ）以外の反撃方法をもたない彼らは、小さな自爆攻撃を繰り返しながら学校占拠事件に行き着き、そこで「あなた方の要求にはだれも応じない。われわれを殺しても何の役にも立たない」というルバエフ少年の言葉にまたもや出会ったのである。

ルバエフ少年の悲劇は、学校占拠事件の惨事は、「われわれを殺しても何の役にも立たない」のに、双方が「われわれを殺し」合う以外にない地点に戦争が至っていることによって、銃には銃を、テロにはテロを、殺戮には殺戮以外のどんな言葉も、どんな解決方法も閉ざされ、固く跳ね返されてしまうところにあった。学校占拠事件のような自爆攻撃がどんなに「冷酷非道」にみえようとも、それは世界が圧倒的な軍事力強化を目指していることの飛沫にほかならない。飛沫の「冷酷非道」に対する衝撃は、あらゆる問題の解決が強引な軍事力制圧によって図られる以外の術を世界が見失っていることに対する衝撃にまで深められなくてはならないのだ。いかに学校占拠事件が「冷酷非道」であろうとも、大きな爆弾を二、三発ぶち込めば、片が付くという身も蓋もない考えのもとに軍事力が強化され、問答無用の激しい攻撃が繰り返される中での、悲鳴一つ封じられてしまっている無数の絶命状態の「冷酷非道」と比較すると、ルバエフ少年が射殺されるまでに目の前の相手にむかって、抗議の声を挙げることができる時間を持ちえたということは、なんとも僥（ぎょう）幸（こう）ですらあり、人間的な最後であったと思われてくるほどである。

北オセチア学校占拠事件に対するメディアの反応は、産経抄にみられるような「何の役にも立たない」情緒的見解に覆われていると思われるが、個々のジャーナリストはどうみたのだろう。江川紹子は『サンデー毎日』の連載（０４．９．２６）で、次のような感想を漏らしている。

《それにしても、町の人口の１％以上がいっぺんに命を奪われた現地の衝撃は、いかばかりだろう。しかも、半数以上が子どもだった、と伝えられている。犯人たちは、なんという非道な事件をしでかしたのか。こんな手法は絶対に肯定できない。

その一方で、次のような言説に触れると、これまた強烈な違和感を感じてしまう。

〈これでは、彼らが頼みとする住民の支持も国際的な理解も得られまい。自らの主張に耳を傾けてもらいたいのなら、こうしたテロ行為からは一刻も早く手を引き、二度と繰り返さないことだ〉（９月４日付朝日新聞）

その通りだ。だが、こんな無茶苦茶な事件がない時に、日本のメディアは、ロシアからの独立を求めるチェチェンで何が起き、ロシア軍が人々に何をしているのかを、どれほど伝えてきたのだろうか。彼らの「主張に耳を傾けて」きたのだろうか。インターネットで過去の記事を検索しても、チェチェンの問題が報じられるのは、悲惨なテロ事件が起きた時に集中している。こんな酷い事件を起こさなければ、問題の存在さえ忘れられているのが、現実なのだ。

しかも、それぞれの事件の詳細もほとんど伝えられない。》

本当に「冷酷非道」であるのはなにか。「冷酷非道」とされる惨事に対して、「悲惨なテロ事件が起きた時」だけ、朝日の主張のように、〈自らの主張に耳を傾けてもらいたいのなら、こうしたテロ行為からは一刻も早く手を引き、二度と繰り返さないことだ〉と建て前を飾ることも、充分「冷酷非道」である。更に、世界的な無関心の中に放置されてきたからこそ、できるだけ耳目を集める残虐な事件を意図的に惹き起こそうとする武力勢力の追い詰められ方に注目しないことも、「冷酷非道」な仕打ちではないのか。江川紹子はチェチェン戦争についての知識も持ち合わせ、ビデオ『子どもの物語にあらず』を見たにもかかわらず、犯人たちの「こんな手法は絶対に肯定できない」と、あまりにも当然で無意味なことを口走ってしまう。「こんな手法は絶対に肯定できない」と口にすることができる遠い場所に自分が立っていることを自覚するなら、我々はただひたすら無言を噛みしめながら、その「冷酷非道」な事件の前に立ち尽くすこと以外に、一体なにができるだろう。

哲学者を自称する池田晶子も『週刊新潮』の連載（０４．１０．７）で、緊張感のない、間の抜けたことを漫然と綴っている。プーチン大統領が「子供を殺すようなテロリストとの話し合いは不可能だ」と言ったことについて、《全くその通りだろう。テロリストたちは、要求そのものよりも、とにかく殺したかったらしい。話し合うつもりは、どうもあまりなかったらしい。だとしたら、行為の原動力は、むき出しの憎悪だけであって、社会変革の理想ですらがお題目である。我々は理性をもつ人間として言葉を所有し、その言葉によって社会を形成し変革してゆくものであるが、その言葉というものの存在が、ここでは完全に無視されているのである。》このあと、死を前提とした自爆テロの信用できなさや、「テロとの闘い」もまた、《ただの「戦争」である》などと御託（ごたく）を並べた上で、《言葉による話し合い、すなわち対話でしかない》のに、《しかし、現状において、言葉は完全に侮られている。よって、この闘いは、行くところまで行くしかないという》、彼女の「哲学」の中身に等しい結論となっている。

彼女のチェチェン戦争と「社会変革の理想」を結びつける「哲学の貧困」に付き合うつもりは毛頭ないが、一言、このような「哲学」の無理解もまた、事態の「冷酷非道さ」にかかわっていることは指摘しておかなくてはならない。おそらく唯一、北オセチアの学校占拠事件に届かせる射程をもっているのは、『週刊新潮』連載（０４．９．２３）の福田和也であろう。《今月二日、韓国の原子力研究所で、２０００年に、極秘で、ウラン濃縮プログラムが進められ、ＩＡＥＡから核開発の疑いを持たれていることが報道され》たことを冒頭で取り上げて、核兵器開発疑惑を韓国側は全面否定するものの、《目の前で、金正日が、核開発を進めているのです。だとすれば、自前で核抑止力を持とうとする、持つ下ごしらえをするのは、主権国家ならば当然のことでしょう》と述べて、現代国際社会のパワーポリティックスをこう主張する。

《つまり核に対抗するには、核しかありえない、力には力で対抗するのがいちばん合理的という身も蓋もないバランスが、世の中を結局動かしているということ。理想も、祈

りも、この常識の前ではフリルにすぎません。この合理性を否定したいのならば、核よりも強力でより人道的な兵器を開発するしかない》と強調した上で、学校占拠事件に言及する。《議論はかまびすしいけれど、どうもポイントがズレている。なんであんな残酷なことを彼らはくわだてたのか、というけれどそんなことは決まったことで、あのように酷くすることが一番効き目があるから、あると信じているからやるのです。

プーチンが大統領に就任して以来、数度にわたってチェチェン制圧のための作戦が行われていますが、その詳細はほとんどあきらかになっていません。徹底した報道管制を敷いているからです。いずれにしろ、チェチェンには、組織的にロシア軍と対抗するだけの軍事組織は残っていないのでしょう。だからこそ、テロ行為が頻発することになる。

ロシアの軍事力をはねかえすために、彼らは国際メディアの力を使っている。恐怖と嫌悪を、ロシア内外に巻き起こすことで、その圧制を弱めようとしているわけです。正規の軍事力ももたなければ、外交テーブルにつく権利も奪われた彼らにとっては、世界中のメディアを揺るがすような事件を起し続けることが唯一の対抗策なのです。

性格は少し違いますけれど、パレスチナの自爆テロもそうですね。イスラエルに対抗するだけの軍事力をもつことを禁じられたパレスチナ人たちにとって、もっとも有効で合理的な攻撃が、自爆テロなのです。

パレスチナの人口９３０万人、イスラエルの人口６６０万人で、出生率はパレスチナが上回っている。自爆テロで、一人あたり一人でも殺していけば、イスラエル人を全滅させて、パレスチナは生き残ることができる。イスラエルの圧倒的な武力にたいして、素朴な引き算を挑むことで、イスラエルとの軍事格差を無意味にできる。そういう合理性を自爆テロはもっているわけです。さらにいえば、女性や子供といった、戦力化するのが難しい人々を、攻撃に利用できるのも、大きい利点なのです。

もちろん、この合理性が、非常にいまわしい計算に基づくものであることは、言を俟ちません。しかし、非人間性をいくら批判したところで、それが合理的であるかぎりにおいて、止まることがない。こうした攻撃が合理的であり得る構造自体について考えないで、その酷さなり、心情なりについてだけ考えるのは、甘やかな現実逃避にすぎません。》

非常におぞましくはあるが、この説明は明快である。理想も祈りも善意もすべて、圧倒的な軍事組織力には細分化されたゲリラ的な自爆テロで対抗するという論理の前では無化され、その論理は第二次大戦末期の日本が採用した神風特攻隊以降、綿々と続いているということだ。その論理に突き入るだけの思考やヴィジョンをもちうるかどうかが我々に問われているのであって、「冷酷非道」を強調したところで「何の役にも立たない」。圧倒的な弱者が取りうる最大の効果的な戦術が自爆テロにほかならないという問題は、人間が人間でありうるギリギリの戦争ゲームのルールや、凄惨な戦時下でのヒューマンな物語といったエピソードに依拠してきた我々の思考の枠組みを解体してしまっているのであり、我々が思考する場所はもはや救いのない現実の地獄の渦中を掻いくぐるしかありえないことを突きつけているのである。　　２００４年１１月１５日記